

12/17(土) 講演会「南極からさぐる宇宙」

南極大陸沿岸にある昭和基地から約1,000km内陸の先には標高約4,000mの高原地帯がある。最低気温はマイナス80度。天体観測に最適なこの場所に関西学院大学理工学部物理学科の瀬田益道教授と筑波大学を中心とした研究グループが、南極大陸に電波天文台を建設する計画を進めている。完成すると(右は完成予想図)、人の目では見ることができない謎の天体「暗黒銀河」を発見することもできると期待されている。



講演会では、天文台建設の進捗状況などを南極での調査を交えてわかりやすく解説する。

一般参加可(中学生以上)、無料、申し込み不要。

■日時:12月17日(土)14時~17時

■場所:神戸市教育会館・大ホール
(地下鉄県庁前から徒歩5分)

■プログラム:

14時「南極に天文台を作る」瀬田益道・理工学部教授

15時30分「南極望遠鏡でさぐる銀河の謎」

中井直正・筑波大学教授(関西学院大学理学部(当時)卒)

■一般からの問い合わせ先:

瀬田益道・理工学部教授 (079・565・7626)

■報道機関からの問い合わせ先:広報室(0798・54・6017)

神戸三田キャンパス冬の風物詩
ソテツのこも巻き作業始まる

神戸三田キャンパスでは12月8日(木)から、ソテツを寒さから守る「こも巻き」作業を始める。12日(月)頃にはキャンパスにあるソテツ100本全てにこもが巻かれる予定。

ソテツは神戸三田キャンパス正門前と大学生協食堂前の2カ所にあり、毎年、冬になると、こもを巻いている。

(雨天の場合は作業順延)

■報道機関からの問い合わせ:
神戸三田キャンパス担当(079・565・7600)まで。

学生チャンピオンが目指すのは
プロの落語家

松山直樹さん(商学部3年生)

松山さんはプロ落語家を目指し、落語漬けの日々を過ごしている。

現在は関西学院大学甲山落語研究会に所属し、高座名は「四笑亭笑ん太(よんしょうていえんた)」。

大学に入って落語を始めたが、日々の稽古に加え、様々な寄席に足を運んで分析を重ね、みるみる実力をつけた。

今年2月、長良川国際会議場(岐阜市)であった学生落語の日本一を決める「第13回全日本学生落語選手権『策伝大賞』」の決勝大会では約1500人の大観衆の前で、4カ月間稽古をして励んだネタ「河豚鍋」を披露した。



「おまはん」「はよ、かまんかい」など、上方落語独特のせりふを絶妙な滑舌や抑揚で表現し、目線やしぐさで伝える細かい描写でも会場の心をつかんだ。特にこだわったのは、鍋ぶたを開ける場面。着物の袖をまくりながらぶたを持ち上げて湯気が上がる様子を目で追い、観客に熱々の鍋を連想させた。審査員で上方落語協会長の桂文枝さんからも高い技術が評価され、参加250人の中で最高賞の策伝大賞を受賞した。この受賞で、日本学生支援機構からも平成28年度優秀学生顕彰「文化・芸術部門」として表彰された。

今、力を入れていることは、東京で流行する落語を学ぶこと。「東京の寄席には勢いがある、観客も大勢入る。生の雰囲気を感じて自分の引き出しを増やし、学生生活残り1年で弟子入りできる力をつけたい」とどん欲だ。12月17日には、甲山落語研究会の引退公演(西宮アクタ東館6階、一般参加可、無料)を控えている。

「お固いイメージがあるとよくいわれる落語だが、ぼくは、真逆の親近感のあるキャラクターが強みだと思う。将来はプロとして独演会を開き、『他のネタも見たい』と思わせる人気落語家になりたい」と燃える。